

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年十二月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第九十三号)

慈

光

第八卷 第十二號

目

哀あひ 愍み 撰せん 受う 近角常觀:(1)

次

常觀先生の德音 花田正夫:(5)
易ゆき 往ゆく 而し 無む 人ひと 福島政雄:(9)

哀

愍

攝

受

近 角 常 觀

外国と外国との戦争の話といはば、私達の事と縁遠きやうなれど、實にこれはお互の心の上の話なのであります。遠慮なくいへば、口に念仏を称へ、信心をいうてゐる一家の日常生活の上に、あれは善い、これは悪いと、角つきあつてゐる有様がこれである。これを外にして信心の味を知る事は出来ない。

私の信心を喜ばせてもらったもとは、大体私は真面目に尽してゐる。奇麗な心を持つてゐる。人に譲つてゐる、宗教のためにつくしてゐる。犠牲献身にやつてゐるとの考へにて日暮してゐたのもとであつた。

即ちこれで自分が善いとの考へが退かない。誰にしても自分は善いと思つてゐる。自分が善いときめてゐると、他人を見ると悪く思へる、不足に感ずる。

『自分は現にこれほどにしてゐるのに、他人はあれでは

いけない……』

との考へが強くなる。信仰の話は此処から初めねばならぬ。

『自分は信心に身を入れてゐる人間だから、悪い人をも悪く思はないで、出来るだけ人に譲り、よくせねば……』さてこれで進んで行つても、若し他人が、自分の譲つてゐる事、努めてゐる事、よくしてゐる事を、理解し同情し、みとめて呉れない時には、

『自分はこれほどにしてゐるのに……』と、他人を不足に思ふ心が湧いて来るのであります。

然し全体、さういふやうに、真に人に譲り、犠牲献身的にやつてゐるものが、いつまでも他人に目をつけて、かれこれいふのは、やはり

『自分はこれほどにやつてゐるのだ、よくしてゐる』といふやうに、人によく思はれたいため、感心してほしうためにやつてゐるので、即ち、名譽のためによつてゐるのにすぎぬ。故に、そのやつてゐる事は真のまことではないのであります。ここに気がつき出すと、初めて

『私は今迄、人が人がと人に目をつけてばかりゐたが、全体、人が悪いといふその自分が悪いのだ』とわかつて来るのであります。

真面目な教育家などが、此話を聞くと、實に涙の流るる処なのであります。処が多くの人々は

『われ／＼の悪い事は初めからきまつてゐるのだ』

とばかり聞いてゐるから、一向に驚きが立たぬのである。私の苦しんだのはこれである。

『自分は正しくやらねばならぬ』

との念の強き人が

『自分のやつてゐる事は正しくない、まことでない』といはれては、これこそ一大事なのであります。

人生に於て、初めから『悪いのがあたり前だ』といふものには、信心の話は耳に入らない。ここはお互によく注意せねばならぬとあります。

然し、必ずしもかかる道徳的問題にていはずともよい。私共が人と心があはぬとか、自分はかう考へてゐるけれども人がみてくれないとて血の涙を流してゐるといふのも同じ事である。

一方には仏法の話聞き、お念仏称へてゐても、日常の日暮には、善い、悪い、済む、済まぬの心がやまぬ。斯ういふ日暮をしてゐる以上は、いつまでもたつても苦しいばかりである。

やゝもすれば

『それは信仰の話とは別だ。この世の事はいつまでも止まぬのだ』

と軽く言つて、逃げようとするけれども、私共の心の中は、何時までたつても此の心が止まぬ。やまぬだけ苦しむのは事実である。この苦しみをどうしたらよいか。

かく苦しんで来る時には、今まで聞いて居た御信心の話なんかは何にもならぬ

『如来様は、悪くともよい。浅間しくともたいじないといふて下さるのだ』

と聞いてみた処が、今まで自分は、善くしてゐると思つてゐたが、このよくしてゐると思つてゐるのが悪いのだと苦しんでゐる時に

『悪くともよいのだ』

といはれても何の安心にもならぬのであります。

従来の説教を聞いてみて

『悪くともよいといふのは仏様の話で、世間はそれでは通れない。それでは安心出来ないのだ』

との考へになつて来る。

長野県の人にしてみると『お前は悪い』というのと『何が悪いのだ』と突つかかつて来るが、仏法の話を開き馴れた人なら『お互に悪いのだから……』といふ位の軽い事にしてすましてゐる。

親鸞聖人が『善悪の二つ総じてもつて存知せざるなり』または『善もほしからず、悪も恐れなし』と、善悪を認めない御言葉は、善悪のみを認めて思ひ惑うてゐる者に対してのお言葉であるから有難いのであります。

ところが、今私が、さういふ具合に、こちらが善悪の心にて人に向つてゐるものであるから、人も亦こちらに對して善悪の心にて向つて来る。だから、如何に心寛く、素直な人にも、私のやうな曲れる根性、浅間しき性分にて向つていつては、呆れはてて、そんな心を持つてゐる奴なのかと、驚いてしまふであらう、と苦しんで来るのであります。

もりでゐたのも、それもつまりは認めてもらひたい、自分のため名譽を得たいとの、自分のためであつたと気づいては、今迄何をしてゐたのか解らなくなつてしまつた。考へれば考へるほど、悪いといふの外何もなくなつてしまつた』

といふやうに突きあたつてしまつて、進むことも、退くことも出来ない。捨土重来、馬を立てなほさんとしても、よくなる見込みもないといふ、全く立つ瀬なき自分の有様なのであります。かくなりては最早、永劫の闇に沈むより外はない、落日孤城、独りぼつちで、闇黒の中に立つてゐる自分を見出すだけである。

そこで私の思つたのは

『この際になりては最早、自分としてはどうするの、かうするのといふ望みはないが、真に世の中に、自分に同情し、理解して、汝は如何に、蕩擻しても、苦しんでも、それが汝の性質、性分だから、それをなほさうと思つても、どうすることも出来ないのだ。自分はそれをよく知つてゐるから決してそれをとがめはせぬぞ、それを可哀想に思ふぞ、見捨てはせぬぞ、同情するぞ』

とかういふ真実を望んだのであります。これが即ち哀愍であります。

普通一般には、人に物を買ふには、金を払ふべきである

ここは大に注意しなければならぬ。今私のいつた此の言葉は、日常生活の上に絶えずあるので『私は今こんなことを思つてゐる』などは、到底正直に人に言ふことは出来ない。もし言うたならば『そんな事を思つてゐるのか。そんなことをしたのか』と呆れられるだけになつてしまふから、言ふ事は出来ない。

処が、ここで氣をつけねばならぬのは、ただ『自分はよいのだ』と思つてゐる時には何の事もないが

『善いと思ふのが悪いのだ。自分の争ひ、へだて、疑ふ心がいけないのだ』

と氣がついてみると

『これではいけない。これでは人は相手にせぬだらう』となつて、最早、立つても居ても、ゐられなくなる。

善くしようとしても善くならぬ。打ち融けようとしても打ち融けられぬ。我慢もやまぬ、一分一厘人には譲れぬ、から突きあたつてしまふのであります。

ここにおいて今更ながら自分の心をかへりみてみると

『自分としては距てもやめたいし、不足の心も起こさず、打ちとけたくあるけれども、如何せん、自分の性分がかういふ致方のないものであるから、どうしてもそれが出来ない。今まで、人のため、国のため、宗教のために尽したつ

のに、然るにここに

『汝は貧乏人にて金を払ふ事の出来ない身である事をよく承知してゐるから、この器物を売るのはない、さういふ金を払へぬ汝に与へようとしてこしらへあげた品物だから与へるのだ』

これが哀愍なのであつて、救済の意味は『悪くともたいたい、ない』といふのでない。

今いふ如く、自分は、この人を隔てる心をやめねばならぬ、よくせねばならぬと努めるけれども、自分の性分として、境遇として、性質として、どうしてもそれが出来ないといふ有様である。かういふ性分、境遇、性質の自分である事を理解し、同情して、

『さういふ汝である事を見た以上、可哀想に思ふぞ、察するぞ』

と、哀愍して下さるのが如来の真実なのであります。

哀愍とは、このよくせんとして出来ず、隔てるのやまない、致しかたのないものをあはれむで下さるのである。

私共の隔て、疑心、争ふ心に対して、隔てず、疑はず、争はぬといふ、無我な、清浄な、真実な御心を以て向うて下さるものであるから、如何に、我慢な、強情な人間も、これを見すてぬお慈悲のために、我が折れてしまつて『ありがたう御座います』と頭が下り、救はれてしまふのが、これ即ち、哀愍なのであります。

(未完)

常観先生の徳音

花田正夫

戦後間もない時、ソ連から引揚げた信友の寺で、お互に無事を喜び合ひながら報恩講の御縁を結びました。その時Fさんといふ七十近い未亡人の方が参詣されて、次の様な述懐をなさいました。

私は子供もなく、一人で暮して居りますが、それでも種々な業報の嵐は絶え間なく吹きすさびます。それにつけましても、三十年前に近角先生にお遭ひ申して、念仏のお導きを頂いて居らなかつたら……只今ではそれひとつが力であり、たのみであります。

私は仏とも法とも知らない家に生れ、縁あつて教育者の主人を持ち、平凡な生活を続けて居りました。ところが、主人が満州方面に就職いたし、私は苗守宅を守つて居りましたが、家が広いので、主人の弟一家も同居して賑やかな生活となりました。

そのうちに、主人の弟が、家を建てるから金を貸してくれと申しますので、早速主人に手紙で相談いたしました。

の方は求道会館に何時も聞きに行かれる人でありました
が、私の顔をしげく眺めながら

『奥さん、あなたは重病人ですよ』

と云はれますから、

『私は何処も悪いところはあります。この通りピンピンですよ』

と答へますと、

『いや身体ではありません。あなたの心の重病ですよ』
と申されました。さすが私が口で申さなくても、異様な感じをすでに受けて居られたやうでした。

その夜、まんじりともしないで夜明けを待ちましたが、皆さんに朝の挨拶をする

『奥さん昨夜は一睡もしなかつたでせう。あなたが度々便所に行かれたので、よく解つておましたよ。あなたは何か非常に思ひつめて居られるやうだが、今日は丁度日曜で近角先生の御講話日ですから、さあこれから参りませう。私もお伴をしますから……』

としきりに勧められるままに、会館で御講話を聞きましたが、サツパリ解りませんでした。元來聞く心もなしで、お義理の聴聞で、心は他事ばかりを考へ続けて居りましたから。

すると近角先生がお講話のあとで私の座席までわざわざ来られて

ころ、金を貸すのは見合せよ、といふ返事でありました。

そこで、その様に弟に申しますと、これは姉さんが貸したくないから、兄さんにさうするやうに言つたのだらう、それに違ひないと申すやうになり、それからと言ふものは弟夫婦と私との間に風波が立ちづめとなりました。

主人は遠く離れて居りますので力になつて貰へず、弟夫婦は出て行きますせず、とうとう私が逃げ出して実家でしばらく暮しましたが、一度出た家には帰りにくいもので、厄介者あつかひされるのがたまたらず、そこをも飛び出しました。そして、心の中は、不平、不満で一杯でありました。

弟が悪い、弟の家内が腹黒い、実家も親が亡いと頼りにならない。主人も主人だ。……見るもの、聞くものが苦しみの種でないものはないといふ有様になりました。

そして、一層のこと死んでしまはうとまで思ひつめるやうになりました。かうして自殺を深く心に決めて、平素懇意にして貰つた方々を訪ひ、それとなく別れを告げにまゐりました。先づ東京の某さんの宅を訪ひましたところそ

『奥さん、今日の話は一向おわかりにならなかつたやうですが、明日午後二時から、九段坂の仏教倶楽部で講話をしますから、是非そちらへ来なさい』

と声をかけて下さいましたので、心の中では、聞きたいと思ひませんでした。口では

「有難う御座います」

と御礼を申しました。知人の方は、私と離れぬやうにして、是非泊れ〜と申されるので又一泊いたしました。そして午後一時すぎです、フツ気がついてみますと不思議なことには、自分ではちつとも聞きたいと思つて居ませんのに、夢中で倶楽部の前に来て居りました。……不思議な力にひかれるとは、全くこのことでありました……。

そこで会館に入りますと、もう先生の御講話は始つて居りました。そして聞くともなしに聞いて居ります私の心に、ピンピンとこたへて来ましたのは

『我々は自分を立派なダイヤモンドの玉のやうに思つてゐるが、仏様のお智慧に照らされて見ると、にせのガラス玉である」と知らされる。……

自分はい、他人は悪いと、憎み、のろうてゐるが、ほんたうに自分が立派なものであれば、砕けるはずはない。それなのに、行き詰つてしまふといふのは、矢張り自分が駄目なからである。……』

といふ一段に及びました時、

「自分は先生の仰言る通りである。自分がよいのに行き詰るはずはない。それに、自殺をせねば生きてゐられないとまでなつて居ることが、にせのガラス玉であつた……」

と知れた時、頭が上げられなくなり、弟にも、弟嫁にも、主人にも、実家の兄夫婦にも申し訳がないとなり、とめどなく涙が流れて、四方八方を合掌して拜むばかりでありました。

そこへ演壇から降りて来られた近角先生が、

「奥さん、何か感じてくれましたか……」

と問はれましたので

「私は今の今まで、自分はよい、他人は悪いとばかり思いつめて、死なうとまで思つて居りましたが、この私が悪いと知らされましたら、もう皆様に申し訳がない、相済まぬとなつて、おわびの涙がとまらないのです……」

とお答へすると、私の知人の方に向はれて、こんなに著しく了解してくれる人も稀なことだ、と仰言つて、これから会館に聞きにおいでなさい、とやさしく仰せになつて下さいました。

ほんたうに、近角先生は私の生命の大恩人でございませす。

と、すでに三、四十年も過ぎ去つて居りますことを、恰も作日の出来事のやうに、文字通り声涙ともにくだる告白

を承りました。

頃、先生は、十二月二日、大平洋戦争開始の六日前、浄土に還歸せられました。先生によつて、帰死回生の慶びを得られた方々は限りなく居られますことで、先生の御忌日を迎へますにつけても、先生の御声咳の一片なりとも誌上に掲げさせて頂いて、皆様と慶びを共にしたいと願つてやみません。

十一月の中旬、直方市の吉田延世さんから次の法信を頂きました。

「昨夜は常観先生の夢を見ました。世の中はすべて五分五分で、あゝかうと、他人の噂、悪口批判……それで明け暮れて居りますが、その外に一步も出られないが、その中から、そのやうにして遂には行詰る、久遠劫来の苦惱する自分をめあての御本願といふことが、先生の御説き遊された本心ありますから、他のことをああかうとすると先生は不機嫌な、悲しいお顔をなされた。さういふ悲しいお顔の夢を見せて頂き、御誠めをうけました」

とあります。矢張り、師走の月が近づくにつけ、吉田さんの心も、先生の慈懷にひきつけられ、夢の中で親しく物語られてゐることを、尊く有難く拝読いたしました。

易

往

而

無

人

(一)

福 島 政 雄

大無量寿経の全体のうちで申しますれば、大変大事なところと私も味はせて頂いて居ります。そのところについて、一応お話しして見たいと思つて居ります。

若い頃に大変調子にのつてそこを何かの集りにお話ししたことがありまして、あの時の調子で行けばよくお話が出来さうにありますけれども、然し一方から申せば、大事な深い、難しいところでありますからして、そんなにうまく話が出来ませんかも知れません。

と申しますのは、御承知であります通り、大無量寿経が大体この前申しましたところで、阿難あなんに対しての釈尊の御説法といふのが終りになりまして、これから弥勒菩薩みろくぼつさつを相手、これは対告衆たいごしゆうと云つてありますが、弥勒菩薩を対告衆として釈尊の御説法が続く。つまりお話をなされる中心になる相手が変わるのであります。

どうして今迄は阿難尊者を相手にしてお話しになり、これからは急に變つて弥勒菩薩を相手になさるのかといふことについては、昔の御講者が、種々なことを云はれて居ります。さういふものの御取次を申し上げてもしやうのないことでありまして、矢張り、その私の感じて申し上げて見たいと思つて居ります。

一体この弥勒菩薩と云へば皆さんよくお聞きになつて居りますやうに、五十六億七千万年と申します、大変に長い年月のあとで、釈尊に次いで仏のさとりをひらかれるお方である。かう云ふ風に言はれてをるお方でありませす。親鸞聖人の御和讃にも『五十六億七千万、弥勒菩薩はとしをへん』といふやうな御言葉があつたかと思ふのであります。非常に長い年月をとらして、そのあとで釈尊のおさとりのおとつきをなさる菩薩だと、斯う云ふことになつてをります。

す。サア、そのことを私、いつも考へるのでありますが、五十六億七千万といふ長い年月のあとで、さとりをおひらきになるといふ弥勒菩薩は、一体どういふお方であるかと考へさせられるのであります。

さういたしますと、私は何時も、斯う云ふことを考へさせられるのであります。弥勒菩薩といふお方は、釈尊よりもあとに、釈尊のやうなさとりをひらかれる人が、弥勒菩薩だけじゃないけれど、すべてのさういふ人々を代表するお方である。しかも五十六億七千万といふ大きな数をいつてありますのは、未來永劫何時々々々でも、この釈尊のおさとりのあとを継いで行く人々はつきない。何処までも、釈尊の道をしたがつて行く人々は永遠につづくと、さう云ふ意味をもつて、さういふ一切の人々の代表者になつておいでになるのが弥勒菩薩であらうと。

さうすると、変な云ひ方でありますけれど、弥勒菩薩の御いのちの中に私共も入つてゐるのだらうと、かう云ふ風に感じて参りますのであります。

弥勒菩薩は、廣大無辺、永遠に続くいのちをあらはし、しかもさとりのいのち、釈尊の道をしたがつて行く、さとりの道をひらいて行く、それが永遠にといふことでありますから、今から永遠にといふのでありますから、今この世に生きてゐる私共も、釈尊の御教をうかがつて、釈尊のおさとりの上からひらいて下さつてゐる道を歩ましていただ

に情の人、情に動かされ易い、情にもろいといふやうな人でありましたのでありますから、さういふ方面から私共の先達となつて、情に流れ易い阿難尊者が救はれる道といふものが、かう云ふ風にして示されてあるといふのは、私共、とかく感情に流れ易いものといふものが、阿難尊者への御説法を聞くと、はじめて我身にしつくりする、さう云ふわけのものであります。これも釈尊のお弟子であつたから昔々のものである、といふのでなく、今の私共にひびいてくるのであります。そこに大無量寿経といふものがどう申しますか、外の大きな智慧といふやうなことを第一にしたお経と違ひまして、私共の全生命の問題でありますけれども、ことに私共の煩惱の問題でありますところの、私共の感情、感情に動かされるところの私共への特別の御説法である。釈尊のおんいのちに、さういふところを阿難尊者をとほして感ずるが故に、大無量寿経といふお経が私共の心に切々としてひびいて参りますといふ、斯ういふ関係を私自身は頂くのであります。

さうでありますから、阿難尊者が対告衆である間はさう云ふ心持である。これから弥勒菩薩が対告衆とおなじになれば、いまさき申し上げたやうな意味になるといふことなのであります。だからこれからさきの永遠の問題になると。そこは短いところではありますが、一寸読んで見ますと

く以上、私共も弥勒菩薩のその廣大無辺なるいのちの中に入つてゐる、ここまで考へて参りますのであります。

それだから弥勒菩薩は私共と生命の続いてゐる菩薩様である。何か、はるか、はるか後の世におでましになる、我々のいのちにも通うてゐて下さる。永遠の求道者と申しますか、永遠にまことの道を求めておいでになつてゐる、その代表者であつて、そのいのちの中に私共が取り入れられてゐるのである。

さうあるのでなければ、弥勒菩薩は五十六億七千万のちの人だ。我々は今関係はない。どんな方であらう。そんな菩薩が出られるであらうかといふやうなことを思ひたくなるのであります。さうでなくて、私共の生命と、いきつなかりを持つ方である。さうでありますから、釈尊は今、その弥勒菩薩に向つて、改めてあとの御説法をなさるといふのは、永遠のこのちの衆生、私共からであります、私共からのちの衆生を相手にして、釈尊がその生命の道、ほんたうに生きぬくところの道といふものを、お説きになつてゐるのである。

さうでありますから、阿難尊者を相手にしてお説きになつてゐる間は、まだ阿難尊者は釈尊の直々の弟子で昔の人であつたといふ気がしないとも限りません。もつともそれだけのものぢやないのであります。私共の感じから申せば、阿難尊者といふ方は、釈尊のお弟子のうちでも、非常

仏、弥勒菩薩、諸天人等に告げたまはく、「無量寿国の声聞、菩薩の功徳、智慧稱説すべからず。その国土は、微妙安樂にして清淨なることかくのごとし。何ぞつとめて善を為し、道の自然なるを念じ、上下なく洞達無辺際なるをあらはさざる。よろしくおの／＼勤精進し、努力して自らこれを求むべし。必ず超絶し去りて安養國に住生することを得ば、横に五惡趣をきり、惡趣自然に閉づ。道に昇ること窮極無し。往き易くして人無し。その国逆達せず、自然のひくところなり。何ぞ世事を棄て、勤行して道徳を求めざる。極く長生を獲て壽樂極り有ること無かるべし。」

それだけの極く短いところがあります。ところがこれが仲々意味深長と申しますか、心持の深いところがあらはれてゐるのであります。

無量寿仏のお浄土については前に私が、かなはぬながらこのお経に説いてあるお浄土の問題を申し上げたのであります。そこで次の

『何ぞつとめて善をなし、道の自然なるを念じ、上下なく洞達無辺際なるをあらはさざらん』
であります。つとめていいことを行つて、さうしてこのまことの道といふものは、自然、何の無理もないというこ

とを思うて、上下なく洞達して、何処へまでもからつとほつて、そしてもうこゝまでといふ限りのないところをどうしあらはさないのか。といふのは、限りのない仏陀の智慧、仏陀のお慈悲といふものを、どうして我身の上に頂いてあらはすといふことをしないでよからうか。それはどうしてもさうなくてはならぬのであると、釈尊が仰言るのであります。

その『道の自然なるを念じて』これは非常に大切なところでありまして、自然とは、しよつちゆう出て参りますやうに、自然法爾といふやうなことでありまして、無理がない、力んでやるのぢやない。力んでやるのぢやないといふのは、そして、道の自然といふのは、まことの道といふものは、向ふからこの私にとどいて下さる。この場合、私の氣持としては、釈尊御自身が、その道の自然、まことの道、廣大無辺なる仏のまことといふものに、釈尊御自身がかされて、その味を私共に語つておいてになるといふやうなことであります。

それは実に何の無理もないのであります。それについてその前に『つとめて善をなし』とあります。成る程、私共は善いことをしなければならぬが、悪いことをつしまなければならぬと、かう云ふわけのものであります。ところが、私共がほんたうにつとめて善をなさうとする時に、始めて自分が駄目であるといふことが解るのであります。

仏様のまことのいのちといふものはカラツと行き渡つて、何処までといふ限りはなく、それが私なら私の生命をとほしてあらはれて来る。私が自分をそつちのけて、仏様といふものは、かういふ廣大無辺なものであつて、実に極みのないものであると、そんなこと云つてある間は、ただかう頭で考へてゐるだけといふことになりすけれど、いよ／＼自分が、つとめて善を為さうといふことに行きつまつて、そこに仏のいのちにふれて来るといふことになる。その、「洞達して辺際なし」といふことが、私の生命の上に味ははれてくる。成る程とうなづかれて来る。かういふ關係になつて参りますと、仏様は生きた仏様であつて、只考へて、何か自分の考へで作りに出したといふものぢやない、そこを、自然に私の身を徹して、仏様の生命をあらはす。かういふ工合になつて参るのであります。

それ
「よろしく、おの／＼勤精進し、努力して自らこれを求むべし」

勤精進でありますからして、精を出して、精進とありますからして、これは静かに進むのであります。それから、つとめてといふのは、このお経では努力といふあの文字を書いてあります。これは、つとめてと読まずに、ゆめゆめとも読んでありますが、ゆめ／＼と読んだ方が或はよいかも知れません。

て、何もしないで、自分はどうせ駄目だといふのぢやないのであります。私共もつとめてよいことをしたいといふ氣持をもつてゐると、そこをさして仰言るのであります。が、但しつとめて善を為さうとつとめて、そこに自分の駄目なことがしみじみと解つてくる。

そこにどうしても善をなさなければならぬといふ自分が、なすこととすること喰ひ違つて、自分が煩惱におちこんで行く。煩惱そのもののかたまりであるといふことが解つてくる時、始めて仏のお慈悲がわかる、仏のお慈悲に照し通されてゐる自分が解るのであります。「つとめて善を為して」といふことと「道の自然なるを思ふ」といふのがひとつづきになつて、善を為してと思つて、それがその徹底しないで駄目になつて行くところに、仏のお慈悲が私に、そういふところを何処までも憐むといふ仏の御慈悲が私に徹つてくるところに、道の自然、成る程、仏の慈悲といふものが、無理のない、私の胸をひらいて下される。

つまり自分の一切を仏様の前に投げ出して、自分のよいことをしようといふのが碎けて駄目になつてしまふのを、仏様のいのちの前に投げ出してさふところに、道の自然といふ味が、そこにこの無理つとめといふことでなくして、仏の御慈悲にかされて、かういふ關係、さうなつて行きますといふと、「上下なく、洞達無辺際」実にその

精進してといふのは、この静かな心をもつて、絶え間なく進んで行く。それから私共の普通には努力奮闘といふことを申しますし、努力奮闘するんだと云つて居りますが、この場合には何時も申します通りに、競争相手か何かあるのであります。あの人に負けぬやうにとか、あいつに負けてたまるものかといふやうに、一生懸命でやる。これだつたら努力奮闘といふのであります。

普通はさういふ風にやるのであります。どうも私なんかのことを申しますれば、とかく相手を向ふにおいて、あの人に負けるものかといふことで、若い時分からよくやつて来たものであります。

然しさういふ風にやる時の自分の心持は落着いてゐるか。と申しますと、決して落着いてゐないのであります。向ふに敵をおいてゐる、そしてあの敵に打ち勝つてやれといふのであります。心が始終落着きのない状態にあるのであります。

精進といふ言葉はさうでなくて、矢張りつとめはげんで行くんでありますけれども、自分の競争相手があらうがあるまいが、敵があらうがあるまいが、自分の為すべきことを努めて、静かに何処何処までも絶え間なく進んで行くのが精進と云はれてをります。そして人間の社会全体としても精進して参るとなると社会全体が落着いて参るのであります。

それから努力奮闘してあいつに打ち勝つてやれとか、あいつに闘争してやつて行くとか云ふやうな調子で行くと、社会は、今日の日本の社会に見られますやうに、非常にさわがしいものになるのであります。

だから私共としては、私自身の問題が第一でありますけれども、敵をまず前において、更にそれに打ち勝つといふやうな努力の仕方といふものではなくして、それはつとめはげむのであるけれども、敵があつてもなくても、始終この静かな心で、絶え間なくつとめて行く。さういふところに行きたい。それはこの私共が佛法を聞かして頂いたおかげでありまして、さうしたところに行きたい念願でやつて居ります。只私自身が若い時から、そんな殊勝な精進といふことが出来てゐるかと思はれますとなく／＼さうは出来なかつたのであります。

そんなに区別いたしますと、私共に努力するといふ方がまだ易いのであります。ほんたうに、この精進の生活に入るといふことは仲々むづかしい。この問題も矢つ張り、ただ自分の力でつとめてやるといふのでは、どうしても努力になり。奮闘、敵を相手と、かういふことになり勝てありまして、精進といふ味が何処から出て来るかといひます問題になりますと、そこは矢つ張りこの広大な仏のまことのいのちといふものに触れて来て、始めて精進といふ味が出てくる。かういふことになつてゐる。つまりどう申しま

法信抄

○ 京都 神原徳草

前略。……十一月三日、一道会の秋の一日は、子供の待つお正月みたいなもので、私には年に一度の光りの日です。特に今年は何と厳肅莊嚴の一道会だつたでせう。

恩師池山先生の慈育を六高在学の頃からうけられ、今年五十四歳になられた北岡行男氏の、漸く光りに驚き、東天のあかつきに向つて坐する姿が拝まれ、有難しといふもなほおろかでありました。

純粹無垢な北岡氏の真姿に接し、又城一雄氏の真剣な求道の姿に、この世ならぬ尊いものを拜しました。

先師の徳香と如来の加威力によつて、浄住寺の丈室は全く御浄土の次の間に化して了ひました。ほんとに有難い一道会でありました。いのちの限り一道会は毎年続けて参ります。……三十一年前、あの十五畳の坐敷を英機を抱いて泣いて夜中歩いたあの坐敷が、こんなに開けて来ようとは。

噫！まことに御手廻し一つ、弥陀の誓願の不思議であります。暗に泣いた坐敷に先師の御遺骨が十九年も鎮まつて下され、そこから清風を起し芳香を放つこの奇特「希有なり世尊」の阿難の驚きを聴くやうであります。……

○ 奈良 北岡行男

……此秋の一道会には私にとつて誠に値ひ難い御縁であつた。……心境駄句、左に連ねる、御笑覧下され度

紅葉せず ちぢれ散りゆく木の葉かな
紅葉せず このまま散るか 散りゆくか
秋深し 一つ果つべしや 吾の癖

すか「人を相手にしないで、天を相手にして、そして努めて行く」といふことになりますと、始めて精進と、天を相手にすると申しますか、そこが仏様の広大なこのいのちにとかさされると申しますか、その慈悲と知慧の力に照らされてと申しますか、そこから、この、もうあんまり自分の敵を問題とせず、自分は唯この一筋の道を進まうと、或はこれを進ませて頂くと、かう云ふ心持となつてくる。そこに精進といふ味が私共に出てまゐると、かういふところでありませう。

未完

白隠禪師の語録

世に智慧ある人の病中ほどあさましく物苦しいことはなきことなるぞや。来し方、行く末のことなども際限なく思ひ続け、看病人の好悪などをとがめ、旧識、同伴の間鬨を恨み、生前には名聞の逐げざるを愁へ、死後は長夜の苦患を恐れ、目を塞ぎて打臥し居たるは、殊勝に物静かなれども、胸中騒がしく、心上苦しく、三合の病ひに、八石五斗の物思ひあるべし。

この思ひ 断つすべもかな 夜長く

満室の菊の香りの裡に在り
目覚むれば 秋日一杯当りおり
開かれし扉の奥を射す秋日
嬉しいぞ 雨雲去つて秋晴れぞ
亡き父も見そなはずらぬ 咲きし菊
老妻の顔綻びし 秋灯下

○ 大分 後藤惟一

道のべの草の中より飛び立ちて林に逃ぐる雉子の子のあり飛び立ちて林に逃ぐる雉子の子のクククと啼くが哀れなりけり
須弥壇の燈明らか天蓋の玉を照せり明けの御堂に
み墓への草をとりつつ思ふかな亡き父上の深き恵みを
心地観経報恩品をよくみかけて不孝におののき巻を閉ちたり
文化の日、明治節を偲びつつ。

○ 名古屋 石塚信二

合掌。……十一月二十七日「光輪」を拜掌して先づ序文を読んで居る中に、故郷に日暮らす老母の身の上や、想出がわき出て、毎日／＼我が身の事に夢中になり忘れ勝な私を恥かしく思ひつつ齊藤先生の御言葉に、泣けてなりませんでした。今人道的罪を犯し、又宗教的罪を犯して獄窓にある私は、今母の思ひを知らされ……。
齊藤先生のお母さんの御言葉「正雄やどんなことがあつても人様のものに手をつけるではないよ」との仰せは、再び我が母の声として響いて来るのです。
先日写経してあつた父母恩重經をとり出して、再読いたしました。……法施を頂ける身をよろこび御礼を申し上げます。云々。

編集後記

年の瀬も迫つて参りました。私に毎年歳末と共に想ひ出されますのは、其角の、

年の瀬や水の流れと人の身は

と、一茶の、

ともかくも、あなたまかせの年の暮

と、芭蕉の、

元旦の用意かしこし年の暮

であります。夫々に、夫々の感興を

覚えます。

○

十二月二日の近角先生の御忌を迎へ、大正七年十月発行の「法蔵」誌から、「哀愍撰受」の御講話を頂きました。

今や宝林壇上より、我等の上に、如何ばかり切々無量の哀愍のひかりと撰受の御手を垂れ給ふことでありませうか。一昨年、洞爺丸事件の頃、近角真観氏から頂きました先生の漢詩を掲げ、

親しく拝しつゝ師走の日を送つて居ります。

題虎石

耽々として病床に侍る
寂に遇うて忽ち哀嘯す
遙に遠く東山を望み

萬年、祖廟を護らん

十月二日

遙山

○

△「易往而無人」の福島先生の御原稿は、当日の御講話の三分一になりませす。紙数の都合で全部が一度に掲げ得ませす、残念なことであります。何時か大無量寿經の講話として全体をひとまとめにして出版させて頂きたいものと念じて居ります。時節の到来をお待ち願ひます。

△近角先生の德音は、名月が中天に輝くと、月影が万水に宿る如く、先生に接しられた方々の心水に、歴々として德音がひびく、そのひびきの二、三を誌し、忌日の記念とさせて頂きました。

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会館講話。

毎月第四日曜午前十時、岡崎市東別院同朋会館、歎異抄講讃。午後一時、藤川町光和会例会講話。

毎月二十四日、午前午後、昭和区小椋町教西寺講話会。

毎月第一日曜午後六時半、歎異抄輪読

会。東区葵町一〇、善法寺。

定価 一部 十七四 (送共)

半年 百四 (送共)

一年 二百四 (送共)

名古屋市南区上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 奥川 正生

名古屋市南区上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番